

中国における大規模語学教育プラットフォーム 「沪江」の教授機能の分析[†]

梁 琳娟^{*1}・田口真奈^{*2}

京都大学大学院教育学研究科^{*1}・京都大学高等教育研究開発推進センター^{*2}

近年、中国ではICTを活用した日本語教育が盛んになっている。中でも「沪江（Hujiang, フージャン）」(<https://www.hujiang.com/>)は、2015年時点で、登録者数8,000万人を突破し、有料サービスの利用者数も300万人を超えるなど、現在、中国におけるもっとも大規模な語学教育プラットフォームであるといえる。しかし、本プラットフォームがどのような教授機能を有するかなど、日本語教育環境としての本プラットフォームについて明らかにされたものはほとんどみられない。そのため、本研究では文献調査ならびにユーザーインタビューによりその教授機能を明らかにするとともに、沪江のオンライン日本語教育のプラットフォームとしての可能性について論じた。

キーワード：Hujiang, 日本語教育, オンライン教育, 教授機能, 中国

1. はじめに

中国において、ICTを活用した日本語教育が近年、盛んになっている。李克強総理の2014年夏のダボスフォーラムにおける「大衆による起業イノベーション」という政策提言により中国のIT領域における「創業」は益々盛んになり、技術と教育を結合して学習アプリを開発する企業が次々に誕生していると李（2017）は述べている。中でも沪江（Hujiang, フージャン）と呼ばれる大規模語学教育プラットフォームは、急速にユーザーを獲得して、注目を集めている。沪江の登録者数は2015年時点で、既に8,000万人を突破し、有料サービスの利用者も300万人を超えている（勞 2015）。

ICTを活用した日本語教育の実践はこれまでもいくつかなされているが、中国という大規模な市場におい

て、どのようなプラットフォームが受け入れられているのか、またその理由は何であるのかについては、現段階では参照可能な研究はほとんどみられない。

そこで、本研究では、沪江に関する先行研究の収集・分析ならびに沪江を利用しているユーザーインタビューを実施し、沪江の学習ツールと教授機能の特徴を明らかにしたうえで、「沪江」のオンライン日本語教育のプラットフォームとしての可能性について論じる。

2. 方 法

2.1. 先行研究の収集

沪江の概要と特徴を先行研究から明らかにするために、中国の文献検索サイトである「中国知网」(<http://www.cnki.net/>)において、2007年から2017年の間で、沪江をキーワードとする文献を検索した。その結果、74件がヒットした。その内容を検討したところ、多くが急速に発展した企業としての側面からの論考であり、その教育的特徴について論じたものはわずか18件であった。18件のうち、16件は沪江の学習アプリなどの学習ツールの紹介を含むものであり、2件は沪江をもちいた教育実践に関する報告であった。

以下では、沪江の学習ツールまたは教授機能に関して論じられている論文を引用しつつ、その教授機能の特徴を論じる。

2018年4月3日受理

[†] Linjuan LIANG^{*1} and Mana TAGUCHI^{*2} : The Analysis of Educational Function of the Language-learning Platform “Hujiang” in China

^{*1} Graduate school of Education, Kyoto University, Yoshida Honmachi, Sakyo-ku, Kyoto City, 606-8501 Japan

^{*2} Center for the Promotion of Excellence in Higher Education, Kyoto University, Yoshida Nihonmatsucho, Sakyo-ku, Kyoto City, 606-8501 Japan

2.2. ユーザーインタビュー

中国において涪江を利用して日本語学習を行っている4人の中国人ユーザーにインタビューを行った。調査対象は、第一著者の知人を通じて協力を依頼し、事前に、インタビューの基本情報や涪江の利用状況に関する14項目からなるアンケート用紙を送付、それへの回答を参照しながら、YYならびにWechat（ともに遠隔通信ツール）を用いて、音声のみによる半構造化インタビューをそれぞれ30分程度ずつ実施した。インタビュー項目は、涪江の利用状況や、涪江の利用でどのような効果が得られたか、また涪江を利用する際に不便なところはどこかといった内容である。対象者の基本情報は表1（後述）に示した通りである。

3. 涪江の概要と特徴的な教授機能

3.1. 涪江の概要

涪江は、2001年に当時上海理工大学英語専攻の3年生であった伏彩瑞が、多くの英語学習者と学習経験を交流し、資料を共有するために作成した「涪江語林」というBBSに端を発する。5年間の無料公開期間の間に一定量のユーザーを獲得したため2006年に修士課程を卒業した伏により、正式に会社としての運営がスタートした。現在では英語のみならず、日本語・韓国語など12ヶ国の外国語や上海・広東地方の方言なども対象となっている。

現在、中国における日本語学習者のうち、涪江を利用しているユーザー数は、他のあらゆる日本語学習プラットフォームの総ユーザー数よりも多い(勞 2015)。また、席ら (2014) が5つの高等教育機関を対象として行ったアンケート調査によると、日本語学習者46人のうち、涪江の認知度は78.2%であった。このように、現在、中国における日本語学習者にとって、涪江は最も利用されているプラットフォームであるということが出来る。

3.2. 涪江で提供されている学習環境

涪江は数多くの学習ツールを開発している。艾 (2015) によると、涪江は2012年から、IOS・Android・WP8の3つのプラットフォームで80個のアプリケーションを開発・提供しており、モバイル端末を利用したユーザーは5,000万人にのぼる。

涪江で開発・提供されている主なアプリケーションとしては、単語を暗記するための「涪江开心词场」、辞書機能をもつ「涪江小D」、様々なカリキュラムが選択できるネットスクール「涪江网校」、リアルタイムでイ

ンタラクティブな授業を可能とする多機能な教育ツール「CCtalk」などが挙げられる。

ネットスクールである「涪江网校」では、対面での教室が模倣されており、担任、TA、クラスメイト、学級委員などが設定されている。また、学習資料などの購入が可能な涪江のみで利用可能な電子貨幣である「涪元」なども導入されている。

以下は、特色ある学習ツールと教授機能として、「CCtalk」と「同卓」をとりあげ、詳述する。

3.3. 「CCtalk」について

「CCtalk」は、リアルタイムかつインタラクティブな授業を可能とする多機能の教育ツールである。学習者は涪江で開設された様々なカリキュラムを選択して、「CCtalk」を通じて授業を受けることができる（有料の授業と無料の授業がある）。授業は生放送で行われ（図1）、教師と学習者、あるいは学習者同士の間で活発なインタラクションが行われる。学習グループを結成することも可能である。これらの授業は録画され、後から公開されることもある。

「CCtalk」では、一定の審査を経たのちに、誰でも教師になることが可能である。その際、涪江による広報活動や運営・技術面での支援が受けられる。教師は、ユーザー数やユーザーからの評価に応じた報酬が受けられる。また、「CCtalk」を通じて授業を配信すること

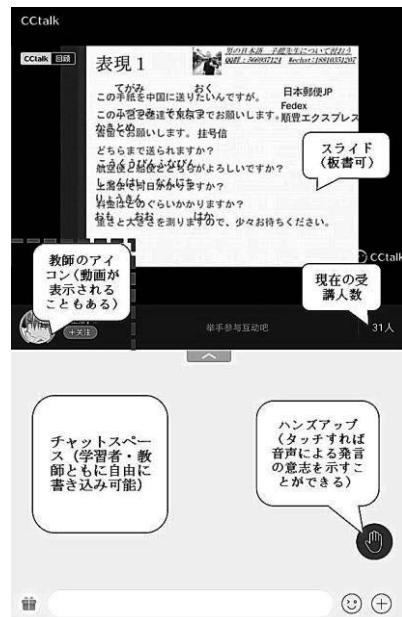


図1 「CCtalk」による受講場面（モバイル端末）

によって、学習者からのリアルなフィードバックが得られるため、教師にとっては、カリキュラムの評価や授業改善に役立てることが可能である。

沅江の「CCtalk」の Web 上で公開されたデータによると (https://www.cctalk.com/biz/verify), 2017年前半までに「CCtalk」を利用したユーザーは1,000万人以上、承認された教育機関は2,000校、教師は3,000人、結成された学習グループは220,000以上であり、多数利用されていることがわかる。承認制度はあるものの、どの程度質が担保されているのかに関する情報は得られなかった。人気のある教師にはスター教師として星印がつけられるなど、ある程度、質の担保を市場にゆだねる仕組みであるといえる。

3.4. 「同卓」について

「同卓（ドータク）」とは、「デスクを共有している人」という意味である。中国の初等・中等教育機関では、1クラス60人前後の生徒が、2人で長机を共有したり、2つの机を並べて座ることが一般的であり、その際に一緒に机を使うクラスメイトを「同卓」を呼ぶ。沅江は、その概念を導入して「同卓」という機能を初めて開発した (常 2013)。学習者がクラス (同じ授業を受ける他のユーザー) の中からいくつかの限定条件を設定して自由に「同卓」を探し、ペアを組むことができる。具体的な手順を図2に示した。

このようにして結成された学習者は、お互いの学習の進捗状況や出席状況などの情報を見たり、ショートメッセージにより、相手を励ましたり学習を促すことが可能となるため、助け合ったり競争したりすること

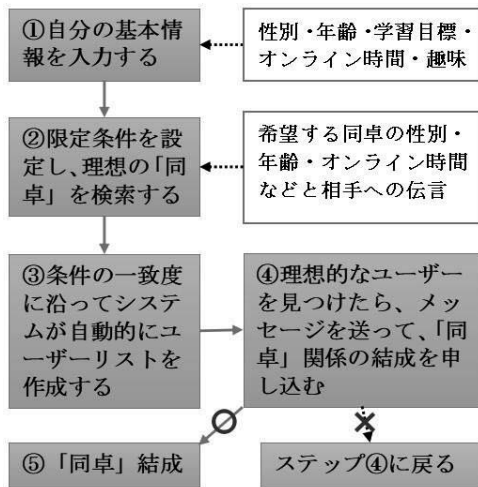


図2 「同卓」結成の手順

で、勉強を進めることが期待できる。「同卓」関係の解除の申請はいつでも可能である。

オンラインの教育では学習継続が難しいことが指摘されているが、沅江の「同卓」機能は、学習者同士の交流やピアプレッシャーといった伝統的な教室において生起する学習促進の機会をオンライン上で再現しようとする試みであるといえるだろう。

沅江の創業者である伏は「沅江の最大の特徴は、そのインタラクティブティである。多様化した学習モデルを通じて、ユーザーを受動的な立場から能動的な立場に変化させ、学習の楽しみを享受できるようにしている。」と述べている (何・刘 2011)。「CCtalk」と「同卓」は、まさに沅江のそういった特徴が表れた学習ツール・機能であるといえる。これまで日本語教育プラットフォームはいくつか開発・提供されているが、教師と学習者・学習者同士のインタラクションには限界があった。沅江はインタラクションを活発にすることによりユーザーの学習継続を促しているといえる。では、実際にユーザーは沅江のそうしたメリットを感じているのであろうか。

4. ユーザーインタビューの結果

4.1. 沅江の良い点

表1は、2.2. で述べたユーザーインタビューの結果の一部をまとめたものである。沅江には数十の学習ツールがあるが、今回の調査対象者4名全員が「沅江开心词场」ならびに「沅江小D」を利用しているが、その他のツールの利用状況は人によって異なっており、利用したことのあるツールも限られていた。限られたツールの利用経験からではあるが、本調査対象者は沅江の良い点として、時空間の制限がなくなり、いつでもどこでも勉強することができることや、コストが低いことといったe-Learningの一般的なメリットを共通して挙げた。その他、沅江は、コンテンツが面白い (B)、練習問題の質が高く、ノートが取りやすい (C)、1つのクラスを複数の教師が担当しており、読解・聴解などの異なる方面に対して、教師の長所が十分に発揮され、教え方が上手い (C・D)、日本語能力試験 (JLPT) 対策が効果的になされている (B・D)、など総じて、コンテンツが優れていることを指摘していた。また、質問に対するフィードバックが早いことを利点としてあげる調査対象者もいた (A・C)。

4.2. 沅江で改善を希望する点

沅江について、不便であると感じたり、効果がない

表1 対象者の基本情報とインタビュー結果

	Aさん	Bさん	Cさん	Dさん
現在の身分	社会人	社会人	学部生	社会人
性別	女性	女性	女性	女性
日本語の学習経験	1-2年	3年以上	3年以上	3年以上
現在の日本語レベル	N3	N1	N2	N2
涪江の利用歴	6ヶ月-1年	2-3年	3年以上	2-3年
1週間あたりの使用頻度	3-5回	3-5回	10回以上	3-5回
利用した学習ツール	涪江学習	○		○
	涪江开心词场	○	○	○
	涪江小D	○	○	○
	涪江网校	○	○	○
	CCtalk		○	○
	涪江听力酷			○
	涪江社团			○
有料サービス	利用	利用	利用	未利用
モバイル端末	利用	利用	利用	利用
涪江での学習目標	Reading Listening Speaking	語彙・文法	語彙・文法 Reading Listening Writing Speaking	語彙・文法
上記の目標達成度	達成できなかった	達成できた	達成できた	達成できなかった
涪江への総合評価(5段階評価)	どちらともいえない	やや満足	満足	やや満足

と感じた点としては、聞き取りと会話能力の向上にはあまり効果がなかった、とした学習者が複数みられた。Cさんは、「涪江听力酷」を用いて聞き取りの練習を試みたが、「主に文の内容を聞いて紙に書きうつすという学習スタイルで、長時間続けることは難しい」と述べている。また、「CCtalk」は先述したように、教師や学習者と会話ができるアプリであるが、Aさんは「中に入って見たものの、全員が日本語で話していたので、自信がなくなった」と述べ、Bさんは「会話練習はいくつかの時間帯が設置されていたものの、いずれの時間帯も都合がつかなかった」と述べた。また、Dさんは、「涪江网校」にほぼ1対1で会話力を向上させるためのカリキュラムがあるが、費用が非常に高いため、利用できないと述べた。

5. まとめと今後の課題

本研究では、涪江の特徴的な学習ツールと教授機能を詳述するとともに、ユーザーからみたメリット・デメリットについて述べた。涪江は中国の大規模語学教育プラットフォームとして、オンライン教育のもつ「い

つでも・どこでも」といったメリットに加えて「CCtalk」や「同卓」を代表とする、インタラクティブ性を重視した学習ツールと教授機能をもっていることが明らかとなった。

これまで、オンライン教育は、継続が困難であることが指摘されてきたが、石川ら(2018)はオンライン大学での学習継続においてメンターや学友との交流が重要であることを自己調整学習方略使用の側面から裏付けている。涪江の教師と学習者あるいは学習者同士の交流を積極的に促進するという方向性はそれに沿ったものであるといえるが、伝統的な教室において生起する学習促進の機会をオンライン上で再現しようとしている点が特徴的であり、こうした特徴が多数の学習者を獲得することにつながっているかもしれない。

一方で、こうした機能が充実することで、学習者は、オンライン教育に直面授業なみのレスポンスを期待していることも、ユーザーインタビューからは明らかとなった。特に会話力などについては、人手がかかるため、高コストではあるが、そのほかの語学学習については、低価格で質の高い学習環境が利用されていくことが予想される。

涪江等オンライン語学教育プラットフォームの可能性と限界を考察するためには、他のプラットフォームを調査対象としたりインタビュー対象者を増やしたりして検討することが今後の課題である。

参考文献

- 艾宜晶(2015) 涪江网13年「征途」: 从 BBS 到估值2亿美元. 财会信报, 2015-2-2(C01)
- 常智韬(2013) 涪江网: 探索中国式「翻转课堂」. 上海教育, (21): 62-63
- 何秀芳, 刘宇(2011) 借力互联网, 学习新天地—专访上海文化创意产业新锐「涪江网」创始人阿诺. 中国贸易报, 2011-11-29(S04)
- 石川奈保子, 向後千春(2018) オンライン大学で学ぶ学生の自己調整学習方略およびつまずき対処方略. 日本教育工学会論文誌, 41(4): 329-343
- 勞杰灵(2015) 在线教育社交化倾向研究—以涪江网为例. 暨南大学, 修士学位
- 李怡彭(2017) 日本語モバイル学習工具の現状調査と対策研究. 北方工业大学, 修士学位
- 席卫国, 李明昊(2014) 日语网络教学平台与本科生日语教学改革. 跨语言文化研究, (00): 291-307

(Received April 3, 2018)